

今年の台風をめぐって

— 台風報道の問題点 —

大 野 義 輝

今年の台風はその発達時季の特徴として7月にあらわれた豆台風群と、9月末から10月にかけてあらわれた一連の台風群との二つに大別することができよう。第1期は第7号台風から第18号台風までのもので、つきつぎと本土を襲うごとく群発したが、何れも小型に属する台風で、本土に接近するにつれて急速に衰弱したり消滅した。当時太平洋岸の各地は6月以来の空梅雨にあえていた際でもあり、文字通り旱天に慈雨をもたらしたものである。

7月15日に東支那海を北上して、本土に接近するかにみられた第7号台風を契機として、以来僅か10日足らずの間に8号、9号、10号、11号、12号と合計6個もの台風が発生して、相ついで本土に接近してきたのである。その後台風の発生はやや散発的となり、7月29日には台風第13号、8月8日には第14号、8月4日前後には第15号、8月12日には第16号と本邦南方海上に現れたが、そのうち第8号、第9号、第12号および第13号の4個が衰弱しながら九州に接近したのみで、いずれも消滅あるいは東方洋上にそれて、事なきを得たのである。ついで第17号、第18号も8月10日前後に相ついで発生したが、本州の東方2000~3000 軒の洋上のもので、いずれも、まもなく消滅してしまったのである。これらの台風は一般にその発生位置が高緯度であったことと、その故かいずれも大型台風までに成長しない、いわば小型台風であったことがその特徴といえよう。ついで8月23日には台湾に上陸した第19号、9月3日には本州東方洋上600 軒の沖合を北上した第20号、9月23日にはルソン島に上陸した第21号と現れるうちに9月に入った。

いよいよ本格的台風シーズンに入ることと非常に憂慮されたが、その後は幸い台風の発生する気配もなく、心配された稲作は6月以来の好天気と相まって、“有史以来の大豊作”とか“豊作街道まっしぐら”とか“満穂型天候”とかいはいはやされるうちに、二百十日、二百二十日の厄日も無事にすぎたのである。9月も月末になるとやがて台風第22号が南洋に発生し、これが本土を襲った第2期の台風群の皮切りとなった。第22号台風は9月

29日午後10時頃九州の南端薩摩半島から上陸し、日本海を経て北海道に再上陸したもので、九州に異例の強風をもたらしたり、新潟に大火をもたらしたものである。ついで10月4日早朝、台風第23号が豊後水道を衰弱しながら北上し、10月6日頃にはマリアナを北上した24号について、11日午後には第25号台風が関東地方を強襲するかみにみせて房総沖を北上し、また10月20日には第26号台風が和歌山県田辺附近から上陸、分裂しながら本州を縦断して同日福島県原町附近から東方へぬけた。

これが第2期の台風群で第1期のものと比べてその発生位置が南に移り、普通の状態にもどったとはいえ、例年よりもおそ目に本邦に上陸したことがその特徴といえよう。このように、台風らしい台風が10月になってから2個も上陸したことは大正6年以来とのことである。

これらの台風について考えさせられることは、本邦接近までは季節的にいつて、いわゆる秋の雨台風型と思われていたが、結果はむしろ台風型であったことで、昨年8、9月の台風同様、従来の常識で、単純にはわり切れない課題をわれわれに残していったように思われない。

台風報道の問題点

昨年の8月から9月にかけて相ついで来襲した一連の台風による報道界のしのぎをけずるはげしい競争は、気象事業にたずさわるわれわれにとってもまた報道界にとってもまさに画期的なことであった。

このようなはげしい競争の結果として、ややもすれば本来の台風の姿が記事の表面から後退して台風を過大評価したり、適切を欠く解説記事のをせたりして必要以上にセンセーショナルに扱う悪い面が現われたのである。しかしその半面台風を通じて正しい気象事業のあり方を強く認識させる絶好の機会を作ったり、気象知識の普及に役立つなど良い面もかなりあったように思われるのである。

今年の台風については報道陣の満を持する態勢のうち例年よりも早目に7月から来襲をはじめ、10月までの

昭和30年(1955年)台風概要

台風番号と 呼名	発生又は発見			台風と なった 月日時	呼名の ついた 月日時	最深示度			最大 風速 m/s	熱帯低又は温帯低 (T.D) (L) となった月日時
	月日時	位置 °N °E	中心示 度 mb			mb	月日時	位置 °N °E		
第1号 Violet	1. 2. 15	6.8 134.4	998	1. 2. 15	1. 4. 15	995	1. 4. 15	6.9 128.0	35	2. 26. 5 T. D. 2. 28. 15
2 —	2. 24. 9	8.3 130.8	1004	2. 24. 15	—	995	2. 24. 15	8.3 130.6	28	再びTS
3 Wilda	3. 21. 15	6.7 168.2	998	(3. 22. 15 3. 24. 9)	3. 26. 9	985	3. 26. 9	21.9 157.8	38	T. D. (3. 23. 9 3. 29. 15) L. 3. 30. 9
4 Anita	4. 17. 9	6.9 139.4	990	4. 19. 9	4. 20. 9	980	3. 24. 15	20.5 129.9	55	T. D. 4. 27. 15 L. 4. 28. 15
5 Billie	6. 3. 3	17.4 114.3	1002	6. 2. 18	6. 4. 9	986	6. 4. 10	19.8 114.7	(41 50)	T. D. 6. 6. 3 L. 6. 7. 9
6 —	6. 24. 3	12.1 113.1	1000	6. 25. 9	—	994	6. 25. 15	16.0 111	18	T. D. 6. 27. 21
7 Clara	7. 5. 9	10.41 46.6	1008	7. 7. 15	7. 9. 15	920	7. 13. 9	25.6 124.9	60	T. D. 7. 17. 3
8 Dot	7. 13. 3	17.8 137.8	1004	7. 14. 15	7. 16. 15	995	7. 16. 9	30.1 135.0	35	T. D. 7. 16. 21
9 Ellen	7. 15. 15	22.9 153.0	1006	7. 16. 9	7. 19. 9	965	7. 22. 15	33.5 142.5	40	L. 7. 25. 3
10 —	7. 17. 9	22.6 137.3	1002	(7. 18. 21 7. 21. 21)	—	990	7. 19. 3	27.6 142.3	30	T. D. 7. 19. 15 L. 7. 22. 21
11 Frau	7. 19. 3	22.0 133.3	998	7. 19. 3	7. 19. 15	965	7. 20. 9	28.3 138.3	60	L. 7. 22. 21
12 —	7. 22. 9	31.1 122.6	990	7. 22. 9	—	990	7. 22. 9	31.1 122.6	25	T. D. 7. 23. 15 L. 7. 24. 9
13 Georgia	7. 23. 15	11.5 153.0	1002	7. 23. 15	7. 24. 9	980	7. 27. 3	23.9 139.5	60	T. D. 7. 29. 21
14 Hope	8. 3. 3	12.2 139.0	1008	8. 4. 9	8. 5. 15	975	8. 7. 21	29.8 138.8	44	T. D. 8. 16. 9
15 —	8. 2. 9	16.0 134.0	1008	8. 5. 15	—	995	8. 5. 21	18.5 127.0	18	T. D. 8. 7. 3
16 —	8. 7. 9	18.0 118.0	1002	8. 10. 15	—	985	8. 14. 3	29.7 136.7	31	T. D. 8. 17. 3
17 —	8. 10. 9	34.5 175.5	1002	8. 10. 15	—	1000	8. 11. 15	38.0 177.0	23	—
18 —	8. 8. 3	30.0 159.0	1010	8. 11. 3	—	998	8. 12. 3	39.5 163.0	23	—
19 Iris	8. 20. 3	10.5 135.5	1006	8. 22. 9	8. 22. 9	965	8. 23. 15	21.8 121.7	(51?) 46	T. D. 8. 25. 9
20 Joan	8. 29. 15	17.0 144.0	1006	9. 1. 9	9. 3. 15	968	9. 6. 9	52.0 175.0	41	L. 9. 4. 15
21 Kate	9. 18. 15	10.5 143.7	1004	9. 18. 21	9. 21. 15					
22 Louise	9. 20. 9	13.0 150.0	1006	9. 21. 15	9. 22. 15					L. 10. 1. 15
23 Marge	9. 27. 21	13.1 144.4	1004	9. 28. 3	9. 30. 9	962	10. 3. 0	28.4 133.9		T. D. 9. 14. 12 L. 10. 4. 15
24 —	10. 2									
25 Nora	10. 7. 9	19.2 134.1	1000	10. 8. 3	10. 8. 3	955				
26 Opal	10. 16. 3	19.0 127.1	1008	10. 17. 15	10. 18. 9	985	10. 20. 9	32.8 134.5		L. 10. 21. 9

4カ月の長い間の台風シーズンであったが、報道界の動きをみると昨年の苦い経験を生かして一部のゆきすぎ記事をのぞいては大体においてうまくいったとみてよいようである。

“台風の報道は如何にあるべきか”という問題は非常にむずかしいことで、これについては過去一年の間、気象台を担当する報道人は、自社の社是に合うように色々創意工夫をこらしていたのである。

自然現象である台風もその記事はその時の社会情勢にしたがって扱ひ方のことになってくることは当然で、気象知識の普及するにつれて、今後ますます複雑化してゆくと思われるのである。昔から現在に至るまで記事の内容を調べてみると、台風が本土に上陸してから大きく報道される時代から、上陸前から大々的に報道される時代にかわってきた。社会の進歩するにつれて現在の報道がうまくいっているからとて来年もそれでよいということにはならないのである。

気象台としても常々報道界を如何にリードしてゆくかということをまじめに考えてみる必要がある。今年の台風も今ふりかえって考えてみると色々の問題がのこさ

れており、以下報道界に関する二三の問題点をあげてみよう。

新聞について

ラジオと新聞が競争すればその速報性については新聞はラジオの敵ではなく、必然的に新聞は新分野を開拓しなければならない。最近ではあらゆる分野でそうであるがその打開策として記事の内容が報道部門よりも、解説記事に重点をおく傾向がみられてきている。台風についても全く同様で、台風情報を大事に紙面にのせたところでわれわれの手もとに印刷されてくるまでには少なくとも4~5時間のおくれがある。その間も台風は刻々と動いており場合によっては“台風は接近しないだろう”という記事を暴風雨中に読まされることもあり得るのである。そこで気象台で発表する情報は少なくとも新聞にはあまり意味がなくなってしまう。そして、このことは台風が本土へ接近すればする程その傾向がよくなるのである。昨年は割合に気象台発表の情報の全文をのせていたが、今年はすっかり影をひそめてしまい、某紙の如きは台風の全期間中意識的に情報をネグってしまったもの

さえ現われた。その反対に大きなスペースで台風の解説記事をのせたのである。なる程新聞を手にとってみるとこの方がより实际的であり、ひいては個人の防災活動にも役立つのである。一例をあげれば紙面ににぎわす台風の進路図である。台風の進路予報に関しては残念ながら今なお完全的中するとはいえない実情にあり、進路に大きな幅があるわけであるが、それを図解で今後の進路を扇形で表現することは誰がみても直観的でわかり易いものである。さらに台風はその進路にしたがって雨量とか、風の分布がちがうものであるから解説記事で風が今後どのように吹きはじめるか、またその風がどのように変化すれば雨に注意した方がよいか、雨よりもむしろ風に注意をした方がよいか、個人の防災上の参考事項をあげ、場合によっては考えられる二つとか三つの進路を示し今のところどこへ進む可能性が強いとか解説的な気象知識の普及に力をそそいでいるのである。

元来台風の進路予想を含めた一般の予報は、利用する対象がはっきりしているわけではなく、いわば最大公約数的な予報であるから、すべての個人に合う予報とはならないのである。その点新聞のゆきかたは正しいものと思われるし、気象台解説担当者もそうすることによって、報道人からしぼられるくるしみから救われるのである。

気象台で発表する予報をう呑みにするような日常の指導方針は極力さけ、最少限の気象判断能力を持たせる方向に進みたいものである。明治以来あまり変らぬ天気予報も割切って出すところに問題があるのであって、この辺で台風と同様解説のようなものを加えて予報の足りざるところを補ってみてはどうであろうか。

ラジオ報道について

放送記者からよく聞かれることは“新聞に出ている内容と同じものをラジオで放送しても差支えないではないか”ということである。なる程そういわれれば、われわれとしては文句のつけようがなく、まして報道の自由を云々されればそれまでであるが、目でみる新聞と耳で聞くラジオとは、同じようであっても本質的には同じではないと思われる。新聞で成功したからとてラジオでも成功するとはいい難い。

情報理論の気象学への導入

戦後目覚しく発展しつつあった情報理論も骨組はほぼ完成したようである。今後はその仕上げと応用分野の開拓に向うことであろう。通信工学はいうまでもないが、物理学、生理学、心理学等々すべての分野に浸透しつつあるこの理論は気象学へも当然応用されるにちがいない。筆者は以前にその可能性を述べたし、また天気のエントロピーを計算した。先般の気象学会で小河原正巳氏

昨年、その弱体性を曝露した新聞が、今年、にがい経験を生かして、解説重点の新生面を切り開いた。その新しい道をラジオが自身の速報性をすてて、新聞のあとを追う傾向の出て来たことは注意すべき点と思われる。

ラジオの持つ武器はその速報性である。ラジオは時々刻々動いてくる台風を正確に速報するのが本筋であり、新聞のまねをして幅のある予想進路図の12時間とか24時間先の予想位置を地名とか緯度経度で放送することなどは、専門家とか船舶関係者には理解できるかも知れないが、大多数の人々には理解できないと思われる。またラジオは新聞とちがって聞きちがいか読みちがいかという大きな問題がある。例えばラジオで“あすの朝東京と名古屋の間に台風が来る”と放送されたとして、それが何かのはずみに“東京”を聞きもらして“名古屋”だけが耳に入ったとすればその結果はどうであろうか。テレビに関しては、新聞とかなり似かよった点もあると思われるが、まだ本格的な経験もないので何とも言いえない実情にある。

今年のラジオの傾向は民間放送とのはげしい競争のゆえか気象台で発表する情報をそのまま放送したことが少なく、新聞と同様、情報をくずして取材形式をとり、そのかわり“発表”という言葉を使わず“気象台の観測によれば”というような傾向が強くなって画一的な情報を極端にきらいはじめたことは注意すべき事柄であろう。

元来情報はラジオ用に書かれているといっても差支えない程であるが、それが今年のようにラジオも使わなくなったことは、それがどこに原因があるかととて研究してみる必要があろう。情報が単に通知電報用のある特定の場所にしか知らされないような実情ならば、あらためて情報というものを考えなおさなければならない。業務規程にある情報が現在の社会情勢に合わないものなら、合うように改定するなり、内容を変えるなりして、世間からとりのこされないことをのぞむものである。

気象事業は報道界の積極的な協力があってこそはじめてなすとげられるものであって、それがひいては世の要望に沿い得る防災を主とした気象サービスでもあるからである。

尙昭和30年の台風概要は11月15日現在別表の通りである。
(中央気象台天気相談所)

は予報の情報量について論じた。最近到着した雑誌によると1955年アメリカではペンシルバニア大学の Holloway and Woodbury が天気予報とその検定に応用し、同年ケンブリッジ大学の E. W. Wahl も天気予報にエントロピーの概念を使うことについて論じている。

それらのくわしいことは別に紹介するとして、合理的な気象技術の発展にはこの方面の研究の開拓が必要であると思うが、さて、どうであろうか。(渡辺次雄)